

(2:00)

仕舞  
熊坂

番組組

(シテ) 今井 克紀

豊田 正勝  
重本 昌也  
(地謡) 豊嶋 晃嗣  
宇高 竜成  
山田 伊純

狂言  
仏師

(すっぱ) 茂山千三郎

(女) 茂山 童司

(後見) 鈴木 実

(3:00前)

能  
鉄輪

休憩

(シテ) 今井 清隆

(ワキ) 江崎欽次朗  
(ワキツレ) 和田 英基  
(アイ狂言) 丸石やすし

(太鼓) 中田 弘美  
(大鼓) 谷口 正壽  
(小鼓) 吉坂 一郎  
(笛) 杉 市和

(4:00)

(後見) 金剛 永謹  
廣田 幸稔

豊嶋 幸洋  
山田 伊純

(地謡)

徳田 宣幸  
芦田 一彦  
宇高 徳成  
上田 英和  
今井 克紀  
種田 道一  
松野 恭憲  
金剛 龍謹

主催 今井後援会 後援 京都新聞社

### 仕舞 熊坂 (くまさか)

仕舞とは能のごく一部分を地謡のみをバックに紋付ハカマ姿にて勤めるもので、大泥棒のシテ熊坂ノ長範が牛若丸との闘いの部分を、長刀を使つてシテ一人で見せます。(所要約5分)

### 能 鉄輪 (かなわ)

鉄輪とは火鉢の中で上にヤカンなどを載せる道具で、五徳(ごとく)の事です。

自分を捨て、後妻を迎えた夫を恨む下町婦人の激しい嫉妬が主題で、これを卑俗になる事なく能らしく描かれた傑作ながら、頭上に五徳を載せ登場する後シテの姿は異様。

この曲は狂言口開(くちあけ)という形式で、いきなり間(アイ)狂言の貴船神社々人が登場。丑の刻詣でをする都の女に神託が降り、これを伝えるため彼女を待つ旨を述べて狂言座に着座します。

すると笠を被った女(前シテ)が、都から貴船ノ宮に参詣する子細を謡いつつ登場。舞台に入ると、到着の態にて床几に腰掛けます。

そこへ間狂言が出て女に神託、即

ち神のお告げ「身には赤い衣を着、顔には丹を塗り、頭上に鉄輪を逆さまに被り、その三つの足に蠟燭の火をともしして怒りの心を持つならば、忽ち鬼神となつて望みが叶えられる」を伝えます。これを聞いたシテは人違いだと言いつつも決意、忽ち形相が変わります。社人は驚き「のう恐ろしや」と退場すると、続いてシテも気色ばんだ態にて我が家へ帰るべく走つて中入りです。

この女の前夫(ワキツレ)の登場。前夫は毎晩の夢見が悪く、陰陽師安倍晴明を訪ねます。すると女の恨みで今夜にも命が危ないと云われ、祭壇に男と女の「ひとがた」を置き祈禱が行われます。やがて鬼となつた前妻の生霊が現れ後妻の髪を掴み激しく責め立て、怨みの数々を述べて男を連れ去ろうとしますが、清明の懸命の祈禱により、やがて守護神に追い立てられ消えて行きます。能ではこの壮絶な状況を物真似も加味しつつ、祭壇の男女の「ひとがた」などは烏帽子と鬘のみで代用されるなど、極めて象徴的に演じられます。

使用面 前シテ 泥眼(でいがん)

鬼女となる能の前シテに使用

使用面 後シテ 橋姫(はしひめ)

般若の前の形相で「鉄輪」専用